

コミュニケーションをめぐる闘争

—アクセル・ホネットにおける承認の道徳とその認識論的基礎について—

千葉 建

はじめに

「僕は見えない人間である。……僕の姿が見えないのは、単に人が僕を見ないだけのことだから、その点を分かってほしい」ラルフ・エリスン『見えない人間』⁽¹⁾

他人に無視されるのはとても耐え難いことである。このことは、それを経験したことのある人ならば誰でも認めることだろう。たとえば、昨日まで仲良くつきあっていた友人に会って挨拶をしたさい、返事がかえってこなかつたとすれば、気が滅入つてしまふことだろう。しかも挨拶をしないのが、たんに相手が不注意から自分に気づかなかつたためではなく、気づいているのに応答をしていないことがわかつたとすれば、われわれはそこで失われた何かを求めて人間関係という迷宮をさまよい歩くことになるだろう。

このようなうまくいかない人間関係において、探し求められているものはいつたい何であろうか。それに対して「承認」という回答を与えて、そのさまざまな形式と人間学的意義を分析したのがアクセル・ホネットである。本稿はホネットの承認論の展開を追思することを通じて、人間の道徳的経験における承認の意味について考察したい。

周知のように、ホネットはいわゆる「フランクフルト学派」ないし「批判理論」の系譜に属し、ホルクハイマーとアドルノそしてハーバー

マスに続く第二世代を代表する人物である。⁽²⁾ 彼はヘーゲルのイエーナ期にさかのぼる「承認をめぐる闘争」という構想を手がかりに、三つの承認形式のうちで承認されることがわれわれの肯定的な実践的自己関係にとって不可欠であることを明らかにした。すなわち、われわれは「愛」のうちで情緒的に気づかわれ、「法」のうちで権利が尊重され、共同体的な「連帯」のうちで社会的に価値評価されることが、われわれの「自己信頼」「自己尊重」「自己評価」にとって不可欠の人間学的前提となつていて。そして逆にそのいずれかが認められないとき、「承認をめぐる闘争」⁽³⁾が開始される、というわけである。⁽⁴⁾ 」のようによネットは社会的闘争の背後に、たんなる功利主義的な利害関心よりも、承認の獲得や回復という道徳的な動機を想定しようとしたのであつた。

しかしここには固有の意味での道徳理論が欠落していた。つまり、この時点では承認をめぐる闘争を社会的コンフリクト発生の端緒として解明してはいても、それを規範的に正当化するような観点が確保されておらず、ハーバーマスの討議倫理学にあたるような道徳理論がいまだ展開されていなかつたのである。そこでホネットは、ハーバーマスの「形式語用論的」アプローチにかわる「社会人間学的」⁽⁵⁾アプローチをとることで、これまで果たせなかつた「道徳哲学への橋渡し」⁽⁶⁾を試みようとすることになる。

こうした近年の承認論の展開のなかで、本稿ではまず社会的な意味での可視性（見える）と不可視性（見えない）についてのホネットの思索を考察する（第一節）。次にそこで中心的問題として取り出された「認識」（Erkennen）と「承認」（Anerkennen）との関係についてさらなる検討をおこなう（第二節）。最後に、「承認」と「物象化〔物化〕」（Verdinglichung）との関連について考察し、承認の規範的側面にあらためて光を当ててみたい（第三節）。

第一節 見えるものと見えないもの

本稿のエピグラフに掲げた言葉は、アメリカにおける黒人差別とその葛藤を描いたラルフ・エリスンの名著【見えない人間】（*Invisible Man*）（一九五二年）のプロローグの箇所である。黒人の主人公は白人社会で認められるべく格闘するが、その中で自分たち黒人に特有の「不可視性」に気づくことになる。ホネットは【見えない人間】における「不可視性」の意味を分析することによって、承認の認識論的前提を明らかにしようとする。

」の黒人の主人公は「筋肉もあれば骨もある」⁽²⁾現実の生身の人間である。彼の姿が見えないのは、単に人が彼を見ないだけであるという。「人は、僕の近くに来ると、僕の周囲のものや彼ら自身を、あるいは彼らの想像の産物だけを——要するに、僕以外のものだけを見るんだ」⁽³⁾と、その主人公は訴える。彼は他人にとつていわば「透明人間」となつてしまつていて。

だがそれは、透明人間のように「体の表面に生じた生化学的な異変のせいではない」⁽⁴⁾。主人公が不可視な存在になつてしまつたのは、むしろ彼が接触する相手の側の「内的な眼、つまり人が肉眼で現実を見る時の目の構造がその理由である」という。⁽⁵⁾こうした人種差別に由来する「不可視性」で問題になつているのは、実際に「物理的意味」で見えないと云ふことではなく、「社会的意味」で見えないものにされているということである。⁽⁶⁾ホネットは前者の字義的意味での不可視性と、後者の比喩的意味での不可視性との区別を手がかりにして、ここで解明されるべき不可視性の構造にせまろうとしている。

まず文化史的研究からは、支配者がその臣下を見ていないと称することで、その社会的優位を表現するような事例が数多く証言されている。たとえば、貴族が召使の前で服を脱いでもよかつたのは、召使がある意味でそこに居ないものとされていたからである。⁽⁷⁾しかし、ここで召使が物理的に現前しているにもかかわらず不可視であるという状況と、エリスンによつて描かれた事例とは次の点で異なる。それは後者に特有の「能動的な性格」(aktivener Charakter)によつてである。⁽⁸⁾つまりエリスンの場合には、白人の男性が目の前にいる黒人に對して、彼が自分には不可視であることをわざと知らしめようとしているからである。⁽⁹⁾こうした事態を表わす日常的な言葉が、「無視する〔見て見ぬふりをする〕」(Hindurchschauen, looking through)という表現である。⁽¹⁰⁾この場合、われわれは目の前の人間があたかも物理的に空間の中に存在していないかのように振る舞つことで、その相手にわれわれの軽蔑を示そうとするのである。そして「無視する」場合、われわれは他人がたんに偶然ではなく意図的に見られていないことを分からせるような身ぶりや素ぶりを伴つており、パフォーマティヴな側面をもつっている。⁽¹¹⁾

ホネットは「」⁽¹²⁾で、知覚する主体が不可視性に対しても能動的に関与しているかに応じて、三つの事例をあげて分析している。まず第一に、ある人がパーティの席上でうつかり知人に挨拶するのを忘れてしまうという無害な不注意(Unaufmerksamkeit)の例。第一に、家主がなにかに夢中になっているさいに、社会的に重要でないがゆえに掃除婦を気にしない(Ignoranz)という例。第三に、エリスンの小説

に描かれているような、黒人には軽蔑の印だとしか理解できないような明示的な無視 (Hindurchsehen) の例である。⁽¹⁵⁾ 「それら」の事例において、それぞれの当事者は「知人」や「掃除婦」や「黒人」として同定されうるのだから、「不可視性」は「認知上の事実」 (kognitiver Tatbestand) ではなく、一種の「社会的な事態」 (sozialer Sachverhalt) とすべきである。⁽¹⁶⁾ つまり、「」では、彼らは視覚的にはむしろ可視的でありながら、ある社会的な関係のために不可視なものとして扱われているのである。それでは「視覚的」 (visuell) な可視性と不可視性、「社会的」 (sozial) な可視性と不可視性はいかなる連関にあるのだろうか。

まず「視覚的な不可視性」は視覚障害や視線をさえぎる障害物によって生じうるものである。つまりこの不可視性は、対象として他人の視野のうちに存在していないという事実を意味する。これに対して肯定的な面で対応する「視覚的な可視性」は、たんなる知覚可能性より以上を意味している。この場合には、ある人物をたんに知覚できるだけではなく、時空システムのうちで特定の属性をともなつた個人としても同定できなければならない。つまり、視覚的な可視性には「基礎的な個体同定の能力」⁽¹⁷⁾ も含まれているのである。そしてこれはわれわれが「認識」 (Erkennen) と呼ぶものの第一の原初的内容を表している。

それでは、エリスンの小説の主人公が告発している「社会的な不可視性」とは、また彼が要求している「社会的な可視性」とは、一体どのようなものだろうか。彼が要求している可視性が「視覚的な可視性」でないことは明らかである。むしろ、彼が社会において「見えない人間」だとされるのは彼が「黒人」として同定されるからなのであり、そのかぎりで「社会的な不可視性」は「視覚的な可視性」を前提にしているのである。では「社会的な可視性」にあって「社会的な不可視性」にないもの、すなわち社会的に見えない人間が求めてやまないものとは何であろうか。

『見えない人間』の主人公は、次のように訴える。「〔自分を無視する男とぶつかった時〕僕は腹立ちまぎれに体を相手にぶつけ返したくなる。……自分は本当に現実の生活に生きていて、すべての音や苦しみを共有しているのだと自分に言い聞かせたくてたまらなくなり、拳を突き出して悪態をつき、人に自分の存在を気づかせてやると誓うことがある。だが悲しいかな、うまくいったためしはめつたにない」。⁽¹⁸⁾ から明らかであるように、彼もまた「すべての音や苦しみを共有している」のに、それが他人から認められていらないがゆえに、彼は「自分の存在」をわざわざ証明しなければならないのである。そのさいに注目されるのは、主人公が「腹立ちまぎれに体を相手にぶつ

つけ返したくなる」とか「拳を突き出して悪態をつき」というように、ある種の「可視的な手段」によって相手の側の「目に見える反応」を引き起しそうとしていることである。しかしませんにこうした反応が返ってこないことが、逆に彼が軽蔑の対象であり、「見えない人間」であることを確証している。それゆえ社会的な可視性の条件とは、自分の存在を肯定的に認めてることを表わす特定の反応を相手の側が表出してくれるにほかならない。そして肯定的な反応や表出の有無という公共的次元において、社会的意味での可視性と不可視性は捉えられるべきなのである。⁽²⁾

さて以上でわれわれは「視覚的な可視性」と「社会的な可視性」との区別および連関について見てきたが、ホネットは、個体同定にかかる前者のうちに「認識」(Erkennen)の基礎的形式を認めるのに対して、肯定的な表出行為をともなう後者のうちには「承認」(Anerkennen)の基礎的形式を認めている。それでは認識と承認の両者はいかなる関係にあるのか。これまでの議論から、視覚上の可視性が社会上の可視性の前提だと考えられるとすれば、認識が承認に先立つことになるのであるうか。ホネットはこれに対して「否」で答え、むしろ承認のほうが認識に先立つことを証明しようとする。そこで以下では認識と承認との関係についてもう少し詳しく考察してみたい。

第一節 認識にたいする承認の優位

時空システムのなかで特定の属性をもつた人間として個体を同定する「認識」の働きと、他者に対する肯定的感情を表情や動作によつて表現する「承認」の働きとはいかなる関係にあるのか。ホネットは承認が認識にたいして時間的にも論理的にも優先していると主張する。そこでわれわれはまず承認の時間的優位の主張について考察し、つぎに承認の論理的優位の主張を検討する」としたい。

承認が認識にたいして時間的に優先しているという主張の根柢は、ダニエル・スターの乳児研究やドナルド・ウェーニコットの対象関係論に代表されるような発達心理学や社会化研究などの経験的研究の成果である。つまりここでは認識にたいする承認の「個体発生上の優位」(ontogenetischen Vorrang)が考察される。⁽²⁾

近年の研究によれば、子供が大人という社会的存在になるにあたつて、自分に関連する人物(たとえば母親)との身ぶりや表情を介したコミュニケーションが重要であり、そうした関係のなかで子供はしだいに他人の視点を引き受けることを学んでいくとされる。そしてそ

した視点の引き受けに成功して、はじめて子供が自己中心的な世界を脱して客観的認識を獲得する」とが可能になるのである。その意味では「ある人間をただ認知的に同定すること」「すなわち認識する」とは根源的な承認を中性化した特殊な事例なのである⁽²⁵⁾。逆に「こうした根源的承認の関係を欠如し、他者の視点に同一化できない場合には、「自閉症」(Autismus)のような症状となつて現れるのである⁽²⁶⁾。

ホネットは以上のような認識にたいする承認の時間的優先性についての考察と並んで、さらに認識にたいする承認の「論理的」ないし「カテゴリ一上の」優位についても論じる。つまり、われわれには認識のカテゴリーでは捉えることができず承認のカテゴリーでのみ捉えることができる事態があることを、ホネットは示そうとするのである。そのさい考察の手がかりにするのが、ルートヴィヒ・ヴィートゲンシュタインの影響を受けたスタンリー・カヴエルの『知識と承認』における他人の心的状態に関する議論である⁽²⁷⁾。

われわれは他人の心を知る」とができるだろうか。たとえば、われわれは他人の痛みの感情を知ることができるだろうか。この問いに対しても、ある者は「直接知る」とができる」と答え、それに懷疑的な者は「知ることはできない」と答える。カヴエルによれば、こうした「知る」との可能性をめぐる認識論的な問題設定のもとでは、痛みを一人称の主体以上に確実に知る」とができる者はいないのだから、懷疑論者を論駁することはできないという。しかしそもそもこうした問題設定それ 자체が事柄の本質を見誤るものにほかならない。つまり、心的状態は認識の確実性の尺度で測られるようならなる知識の対象ではないのである。それでは心的状態はいかなるものと考えられるべきか。

カヴエルによれば、心的状態は、主体がたとえば「[私は] 痛い！」とこう言葉で表現するものであり、そこで話し相手に注意を向けるものである。そして「[私は] 痛い！」と語りかけられた相手は、「君が痛いの、わかるよ」(«Ich weiß, du hast Schmerzen.»)と返答する」とで、その感覚への「関与〔分からかい〕」(Anteilnahme)を表明するものである。⁽²⁸⁾こうした返答においては、相手の痛みそのものについての認識の確実性が問題になっているわけではなく、相手が痛みをこのように「示す」と(Zeigen)に対していかに共感的に反応するかが重要なのである⁽²⁹⁾。

「」でカヴエルが「関与」と「う」と「言いたい」とは、他人の感覚状態についてのあらゆる認識に先行して、ある種の態度がなければならぬといふことである。その態度とは、私が他人の感覚世界にいわば「実存的に引き込まれてゐる」(existentiell einbezogen)と感じる

ような態度である。⁽²⁾こうした他者との密接な結びつきによって、はじめて私は他者の感情表出を意味あるものとして、すなわち適切な仕方で反応するよう自分に要求するものとして知覚することになる。それゆえカヴェルにとって「承認すること」とは、「相手の表出する振る舞いが何らかの反応を要求するものとして理解できるような態度をとること」⁽³⁾を意味するのである。

こうしてカヴェルにしたがえば、「私は痛い！」という感覚命題を理解することは、それにふさわしい情動的反応を示すことなのであり、何の反応も示さないことやもっぱら否定的な反応を示すことは、その命題の意味を適切に理解していない、ということになる。⁽⁴⁾このようにカヴェルにとって、言語を理解することは、承認の態度をとるという非認知的な前提と緊密に結びついているのである。

さてホネットによれば、カヴェルがこうした言語分析を行うことで、認識にたいする承認のカテゴリー上の優位を提示したのは、人間のコミュニケーションについての誤ったイメージを防止するためである。つまり、「社会的な相互行為という織物は、哲学でしばしば想定されるように認知的行為を材料とするのではなく、承認の態度という素材から織りあげられているのである」⁽⁵⁾。われわれは他人が「痛い！」といった場合、たいてい何の困難もなくその命題の意味するところを理解することができる。しかしそれが可能なのは、われわれが認識主観として他者に対峙しているからではなく、われわれがあらかじめ他人に対して開かれた承認の態度をとっているから、そうした発言がいかなる行為を要求しているのかを自明なものとして受け取っているからなのである。

以上見てきたように、われわれの言語によるコミュニケーションを基層で可能にしている承認の関係、いわば「承認のコミュニケーション」は、われわれの社会的関係においてきわめて重要な部分をなしている。それゆえ本節で考察した「認識にたいする承認の優位」ということも、二者関係にとどまらず、われわれの社会的な相互行為一般に対する関係からあらためて捉え返されなければならない。そこで次節では、ホネットがマルクス主義の重要な概念である「物象化」の概念を再考することによって社会全体において承認関係が失われている状態を考察した議論を中心に考察していきたい。

第三節 承認忘却としての物象化

さてここでホネットの「物象化」についての議論を検討するまえに、もう一度エリスンの「見えない人間」に立ち戻ってみたい。ホネツ

トに「不可視性」の現象学にとっての眞の宝庫⁽²⁾と呼ばれた本書はまた「物象化」の現象学⁽³⁾にとっても眞の宝庫であることがわかる。黒人の主人公は、彼の入学した黒人州立大学の理事で白人のノートン氏とともにスラム街にある「ゴールデン・デイ」という店を訪れてひどい目に遭つたが、そのさい彼らはひとりの黒人の元医者と出会い、話をすることになる。戦時中フランスに従軍したとされるこの元医者は、この時点では白人に迎合してうまくやつていこうとしている主人公と、黒人を大学に入学させる」とで名士然としているノートン氏の両者について、次のように喝破する。

「すでに彼〔＝黒人の主人公〕は、自分の感情だけでなく人間性も抑圧することを学んでいる。彼は見えない人間であり、否定の生きた権化であり、あんた〔＝ノートン氏〕の夢の最高の完成品なんですよ！ 機械的な人間なんですよ！」⁽⁴⁾

「しかし、まじめな話、あんたらは目で見る真実を見ることができないし、聞くことも嗅ぐこともできやしない……そしてこの少年、この機械は地元の土そのものでできていながら、あんたより見えない。可哀そうなつまづき野郎だ、あんたらは互いに相手がちゃんと見えないんだから。あんたらにとっちゃ、この青年はあなたの成功のスコアボードの点数だし、人間ではなく物、子どもか、あるいはそれ以下——形のない黒い物ですよ。それにあなたは、実力者でありながら、彼にとつては人間ではなく、神であり、力であり——」⁽⁵⁾

こうした発言のうちでまず注意をひくのは、「見ることができない」、「聞くことも嗅ぐこともできない」というある種の感覚の欠如・無能力を示す一連の言葉である。そして「」ではこれらの無能能力が「感情や人間性の抑圧」に起因していることも示唆されている。さらに「」で注目されるのは、「機械」「機械的な人間」、「物」「形のない黒い物」といった、いわば「物象化」された表現である。大学理事のノートン氏は、当時社会的に差別されていた黒人たちを大学に入学させると「一見すると人道的な活動を行つており、少年時代の主人公にとって「偉大な白人の父親」とでもいべき存在であつたが、その内実たるや、自身の社会的名声を獲得するための手段にすぎず、黒人を「人間ではなく物」(a thing and not a man)として扱う彼の姿は、元医者の目からすれば「魂の処刑者」にほかならない。⁽⁶⁾このようにエリスンの小説のうちでは、不可視性と物象化との連関があらかじめ素描されていくといえる。

さて、ホネットは不可視性と物象化との連関についてのようすに考へてゐるのだろうか。彼が両者を媒介する概念として提起するのはおなじみの「承認」の概念である。これまで見てきたように、ホネットは「不可視性」を認識に先だつ根源的な承認の欠如として規定するが、それと同様に「物象化」を「承認忘却」(Anerkennungsvergessenheit) ⁽³⁵⁾として規定しようとする。それでは「承認忘却」としての物象化とはいかなる事態を指すのであるうか。

ホネットが物象化を論じた著書のエピグラフに掲げているように、「あらゆる物象化はひとつの忘却である」(»Alle Verdinglichung ist ein Vergessen.«) ⁽³⁶⁾)と洞察したのは『啓蒙の弁証法』のM・ホルクハイマー／T・W・アドルノであった。⁽³⁷⁾彼らは、啓蒙が外なる自然だけではなく内なる自然をも対象化し計算したてる結果、外的にも内的にも自然を抑圧し破壊してしまい、ふたたび神話へと転落してしまつゝ」といふ警鐘を鳴らした。そしてこうした啓蒙の道具体的理性のうちに、自然との根源的関係を忘却した物象化を見出したのであつた。こうした彼らの思想に影響を与え、物象化をわれわれの社会的現実と受けとめ考察をめぐらせていたのが「歴史と階級意識」におけるジエルジ・ルカーチである。

ルカーチにとって物象化は、たとえば誤つて人間を物だと認識してしまうといった認知上のカテゴリーミスティックを意味するのではなく、われわれのある種の「ハビトゥス」や「振る舞い方」に關係するものである。⁽³⁸⁾また物象化は、「道徳上の不正」というわけでもない。なぜなら、そこには個人に帰責可能な「罪」や「責任」を示すようなものはおよそ何もないからである。⁽³⁹⁾ルカーチによれば、物象化とは、「習慣的に硬直してしまつた物の見方」を意味しており、そうした見方をする」とで人々は個々人や出来事に対して興味関心を抱く能力を失つてしまふといふ。そして主体がこうした能力を失えば失うほど純粹に受動的な観察者となつてしまい、こうして社会的環境や物理的環境だけでなく内面生活もまた「物体の集まり」(ein Ensemble von dinglichen Entitäten)として現れるべく、といふわけである。⁽⁴⁰⁾

しかしこうしたルカーチの物象化の説明は、ホネットにとってはあまりに単純で受け入れることができないものである。ルカーチは物象化をいわば「承認」が「客觀的な認識」に交替する出来事として描いてゐるが、ホネットによれば承認と認識との関係はこうした単純な対立の関係と捉えるべきものではない。⁽⁴¹⁾むしろ、一方の極には「承認への感受性をもつた認識の諸形式」があり、他方の極には「認識がそれに先行する承認に由来することを見失つてしまつた認識の諸形式」があると考えるべきだと主張する。⁽⁴²⁾つまり、「第一の場合、認識作用や

観察行為は、先行する承認に依存している」とを意識するなかで行われる」が、これに対し「第一の場合には、認識作用や観察行為は、こうした依存性を自己から分離してしまい、認知に関わらないあらゆる諸前提を向こうにまわして、みずから自足的であると思いつむのである」⁽¹³⁾。このようにホネットは、先行する承認に認識が依存していることを忘れて認識がそれだけで自足状態にある」とを「承認忘却」と呼び、「こうした意味での承認忘却こそが、ルカーチの意図していたはずの「物象化」にはかならないと結論づける。先行する承認を忘却してしまうからこそ、ルカーチの描いたような、いわば表情を失った物の世界が立ち現れるのである。

それでは、なぜわれわれは先行する承認を忘れて、物象化に陥ってしまうのだろうか。また、「」や「忘却する」とは何を意味するのだろうか。ホネットによれば、「」や「忘却」(Vergessen)とは、習い覚えたことを忘れる(Verlernen)という強い意味ではなく、ある「」とが意識から逃れ、それへの注意力が低下してしまつ」と(Aufmerksamkeitsminderung)を意味する。つまり、「」や「承認忘却」とは、先行する承認のおかげで認識が可能となっていることにに対する注意力の低下を意味するのである。

さてホネットは、「こうした意味での承認忘却の理由として二つの場合を区別してくる。

承認忘却の第一の理由は、「目的の自立化」によって認識の態度が一面化なし固定化してしまつ」とである。⁽¹⁴⁾ホネットはこれをテニスの例で説明している。⁽¹⁵⁾親友とテニスをしたい、勝利に夢中になるあまり、相手が親友であることを忘れてしまつ」とがある。この場合、勝利という唯一の目的のために、それ以外の動機や目的（「親友と一緒に時間を過ごしたい」等々）は忘れ去られてしまつたのである。このように、ある一つの目的に注意が集中するあまり、それ以外のものに対する注意力が低下することが起りうる。そして認識の活動に集中するあまり、その基底にある承認に対して注意力が低下してしまつ」とに、物象化の一つの根がある。

承認忘却の第二の理由は、「先入観」や「ステレオタイプ」のために承認を事後的に否認してしまうことである。⁽¹⁶⁾ホネットはとりたてて例をあげて説明していないが、エリスンの小説に描かれているような人種差別や女性蔑視の言説にみられる一連の思考図式にしたがって、実際に目の前にしている人間に對してステレオタイプの反応しかできないような場合がこれにあたる。そしてもしも相手が自分の先入観に合わなかつた場合には、そうした都合のわるい事実には注意を払わないでおくのである。承認に対するこうした意味での注意力の低下は、ホネットのいうように、「拒却」というより「知詭」(Leugnung)ならし「拒却」(Abwehr)といったほうがよいだろう。そして「」した

承認の否認もまた、われわれの間の物象化された関係のもう一つの根となつてゐるのである。

さて以上見てきたように、ホネットはルカーチの物象化概念を承認論的に再定式化する」とによつて、承認忘却という視点から社会批判が可能になる地点まで到達したといえる。⁽¹⁾承認はわれわれの社会生活にとって根源的な意味をもつており、それをむやみに傷つけることは許されない。近年の社会批判がもっぱら正義の原理に定位してきたのに対し、ホネットは「社会は普遍的に妥当する正義の原理が傷つけられるのとは別の意味でも規範的に失敗することがありうる」として、承認の関係を再構築することによってより良き生を社会に実現しようとする。承認忘却に歴史がいかに関与しているのか、また承認忘却において倫理はどのような役割を果たしているのかなどについて、ホネットの議論はまだ端緒についたばかりではあるが、承認の優位性をめぐる議論はわれわれにとって忘れてはならない事柄であるようと思われる。われわれもまた忘れかけていた承認を呼びおこし、失われた承認を取り戻すべく、承認のコミュニケーションを続けていかなければならない。

最後にもう一度エリスンの『見えない人間』からの引用で本稿を締めくくりたい。先ほど引用した箇所の少し前で、ノートン氏はフランスに従軍したとのある黒人の元医者に、どれくらい滞在したのかを尋ねる。それに対して元医者は「かなり長い年月でした」と答え、さらに次のように続ける。

「かなり長かったんで、忘れちゃいけない基本的なことを忘れちゃいました」

「人生についてのことをおもな」と。たいていの百姓や民衆なら、経験を通じていつも知つてゐるようなことです。頭だけではめつたにわからないうちですよ」⁽²⁾

注

(1) ラルフ・エリスン（松本昇訳）『見えない人間（一）』、南雲堂フェニックス、二〇〇四年、九頁。

(2) Axel Honneth, *Kritik der Macht. Reflexionen einer kritischen Gesellschaftstheorie. Mit einem Nachwort zur Taschenbuchausgabe, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1989.* アクセル・ホネット（河上倫造訳）『権力の批判——批判的社會理論の新たな地平』、法政大学出版局、一九九一年。ホネットによる批判理論の紹

介としては「権力と批判理論」を題された《ホネット・シンボンウム》の報告も参照。大野英一・河上倫逸・武市明弘編「歴史と社会」通巻第8号、一九八八年、一七七頁—一八九頁。

- (3) Axel Honneth, *Kampf um Anerkennung. Zur moralischen Grammatik sozialer Konflikte*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1992. アクセル・ホネット（山本啓）直江清隆訳）『承認をめぐる闘争——社会的コトハコトの道徳哲学』、法政大学出版局、一九〇一四。

(4) 水井彰／日暮雅夫編著「批判的社会理論の現在」〔見洋書房、一九〇一一年、一九〇六頁〕、「私の構想とハーバーマスの構想とは、全く違います。私は自分の道徳理論について全く語っていません。ハーバーマスには討論倫理学がありますが、私にはそのような厳密な意味での道徳理論がないのです。私の道徳理論の構想をあえて述べるならば、区分された承認諸関係とそれらの義務論的性格の道徳的内包を固有の意味で説明したものになるでしょう。そして、この社会理論は、『これらの区分された承認諸関係による社会的構造へと方向づけられていることによってハーバーマスの社会理論とは異なる志向性を持つことになるでしょう……』の両者の違うの核は、形式語用論的な接近方法と社会人間学的な接近方法に特に見出されまよ」。

- (5) 同書、一一一頁。

- (6) Axel Honneth, *Unsichtbarkeit. Stationen einer Theorie der Intersubjektivität*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 2003, S. 10-27.

- (7) ハルフ・ヒリスン、上掲書、九頁。

- (8) 同書、九頁。

- (9) 同書、九頁。

- (10) 同書、九頁。

- (11) Axel Honneth, *Unsichtbarkeit*, a.a.O., S. 10.

- (12) Ebd. S. 11.

- (13) Ebd. S. 11.

- (14) Ebd. S. 11.

- (15) Ebd. S. 11f.

- (16) Ebd. S. 12.

- (17) Ebd. S. 12.

- (18) Ebd. S. 13.

- (19) Ebd. S. 13f.

- (20) ハルフ・ヒリスン、上掲書、一〇頁。

(21) Axel Honneth, *Unsichtbarkeit*, a.a.O., S. 14f. ホネットが指摘する「無視」は、当事者だけではなく「他人にも確認や認められること」である。

- (22) Axel Honneth, *Verteidigung. Eine anerkennungstheoretische Studie*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 2005, S. 48.

- (23) Axel Honneth, *Unsichtbarkeit*, a.a.O., S. 27.

- (24) Axel Honneth, *Verdinglichung*, a.a.O., S. 48f.
- (25) Ebd., S. 54ff. Vgl. Stanley Cavell, „Wissen und Anerkennen“, in: ders., *Die Unheimlichkeit des Gewöhnlichen*, hg. v. Davide Sparti und Espen Harrner, Frankfurt am Main, 2003.
- (26) Ebd., S. 56.
- (27) Ebd., S. 57.
- (28) Ebd., S. 57.
- (29) Ebd., S. 57.
- (30) もやもや無関心や否定的反感も、せりばたんに認知的ではない承認の態度が認められるかわりでは、ふやわしい反感として理解される可能性が排除されじこねわけではなし。Vgl. ebd., S. 59.
- (31) Ebd., S. 58.
- (32) Axel Honneth, *Unsichtbarkeit*, a.a.O., S. 14.
- (33) ハルト・ハッペ、上掲註 1116頁。
- (34) 同書、1117頁。
- (35) 同書、111四頁。
- (36) Axel Honneth, *Verdinglichung*, a.a.O., S. 62ff. 「承認忘却」という言葉は当然のいとながらハイデガーの「存在忘却」(Seinsvergessenheit) を想起させる。ハイデガーもまた「表象」や「認識」は先立つ人間的現存在の根本体制として「気遣ふ」(Sorge) を発見していく。した志向において一致する」一つの立場はその歴史認識において袂を分かつ。ハイデガーの存在論が、存在忘却、存在との近さからの類落を存在史の運命として受け入れるよう「放下」を勧めるのに対して、批判的社会理論は、承認忘却の原因を人間の歴史のうちに突き止め、その解決を社会批判によって成し遂げようとする。
- (37) マックス・ホルクハイマー／テオドール・W・アドルノ（徳水拘訳）【啓蒙の弁証法——哲学的断想】、岩波書店、一九九〇年、三六六頁。「積年の自然支配、医療技術やそれ以外の技術は、そういう苦しみを蔽い隠す眩惑から、その力を汲みとつてゐる。それらは、忘却によつてはじめて可能になつたのではなかろうか。科学の超越論的前提としての、記憶の喪失。あらゆる物象化は忘却である。】
- (38) Axel Honneth, *Verdinglichung*, a.a.O., S. 63.
- (39) Ebd., S. 63.
- (40) Ebd., S. 63.
- (41) Ebd., S. 66f.
- (42) Ebd., S. 67.
- (43) Ebd., S. 68. ホネットは認識と承認の関係について、前者の場合はお互ひに「透明」(transparent) や「達へ可能」(zugänglich) であるが、後者の場合は「不透明」(intransparent) や「進入不可能」(unzugänglich) であるところ。Vgl. ebd., S. 67f.
- (44) Ebd., S. 72.

- (45) *Ebd.*, S. 71.
- (46) *Ebd.*, S. 72.
- (47) *Ebd.*, S. 72.
- (48) ホネットの社会批判についての詳細な検討は別稿を期したい。
- (49) *Ebd.*, S. 106
- (50) ラルフ・エリスン、上掲書、一一一頁。

Kampf um Kommunikation. „Die Moral der Anerkennung“ und ihre epistemologischen Grundlagen in der Sozialphilosophie von Axel Honneth.

Ken CHIBA

Die vorliegende Arbeit beschäftigt sich mit dem Begriff der Anerkennung in der Sozialphilosophie von Axel Honneth, insbesondere mit seiner normativen bzw. moralischen Bedeutung für unser soziales Leben.

Dabei betrachtet sie zuerst die „Sichtbarkeit“ und „Unsichtbarkeit“ in einem visuellen und sozialen Sinne. Wenn man mir z. B. seine Missachtung zeigt, erkennt man mich als ein Individuum mit besonderen Eigenschaften und sieht mich hindurch. Folglich setzt soziale Unsichtbarkeit notwendigerweise visuelle Sichtbarkeit voraus. Weil man mich ferner durchsieht, indem man mir keine anteilnehmende Reaktion zeigt, ist sein Akt des Hindurchsehens am Wegfall der anerkennenden Reaktion öffentlich zu erkennen

Dann werden Betrachtungen über die Beziehung zwischen dem „Erkennen“ und dem „Anerkennen“ angestellt. Daraus ergibt sich, dass das Anerkennen vor dem Erkennen nicht nur (onto-)genetisch oder zeitlich, sondern auch kategorial oder logisch einen Vorrang hat. Die bloß kognitive Identifikation eines Menschen stellt also den Sonderfall der Neutralisierung einer ursprünglichen Anerkennung dar.

Schließlich wird das Verhältnis der Verdinglichung zur Anerkennung untersucht. Nach Honneth handelt es sich bei der Verdinglichung um die „Anerkennungsvergessenheit“, die die Aufmerksamkeitsminderung dafür ist, dass das Erkennen vom vorgängigen Anerkennen abhängt. Da die Anerkennung das wichtigste Moment für das soziale Leben ist, so muss die Erinnerung der Anerkennung in unsrer alltäglichen Kommunikation erkämpft werden.